

財団法人

住吉隣保館ニュース

No.9

■編集・発行 財団法人住吉隣保館

■編集発行人 友永健三

財団法人住吉隣保館 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東5-3-21

TEL 06-6674-3732 FAX 06-6674-7201 <http://www.sumiyoshi.or.jp/>

この号の内容

- 1 市民交流センターすみよし北特別事業『わかりやすい「住吉と能」』(1)～(9)
- 2 財団法人住吉隣保館の動き
(0) (10)

市民交流センターすみよし北・特別事業

～住吉さんと地元の1800年から学ぶ～

わかりやすい「住吉と能」

～住吉を舞台にした能のかずかずを

画像や謡を交えて楽しく解説～

講師：山下麻乃さん(観世流能楽師)

12月14日13時30分から「住吉さんと地元の1800年から学ぶ」の講座(市民交流センターすみよし北の特別事業)の第8回として、NPO法人かなえ会理事長池田外美雄さんの司会で「わかりやすい『住吉と能』～住吉を舞台にした能のかずかずを画像や謡を交えて楽しく解説～」と題する観世流能楽師山下麻乃さんのお話があった。聞き覚えのある謡曲「高砂」の一節「高砂やー」ではじまり、凜としたお仕舞いで終わり、日頃持てない貴重な時間を過ごさせて頂けた。

(以下の文中パワーポイントの画面であることなどの注を入れていない。適宜読み取って頂きたい。またこの報告は当日の講演を事務局でまとめ、講師に手を加えて頂いた。)

はじめに

今日は住吉と能ということで住吉に関連のあるお能をご紹介します。今年に住吉大社創建1800年ということで住吉大社には長い歴史がありますが、能も長い歴史があります。能は650年といわれていますが、650年前に何があったかというそれは室町時代にして、世阿弥が能を大成した時代が650年前であって、それ以前にも猿楽としての長い長い歴史があるものですから能の始まりが何時なのだというとはっきりとは判っていません

世阿弥が能を芸術として大成させて、足利義満に認められて、多く著書を残していますから、そ

こからの歴史は非常にハッキリしています。その後できてきた能というものが芸術的であり、その頃の台本が残っていて、ほぼ今もその頃のものがそのまま使われているということで、650年前世阿弥の時代に能が大成されたといわれています。一説によれば聖徳太子のプレーンであった秦河勝はたのわかかつという人が聖徳太子のためにこの世を祝賀するような曲を三曲、作曲して奉ったのが能の始まりであるといわれています。本来能というものは浄きよめの芸術です。能は宗教儀礼ですので、神様が出てくるもの、成仏できずにこの世に残っている魂が私を成仏させて下さいと出して出てくるものなどが多いということになっています。

そのような長い歴史があるので、能の物語というのも古いものが多いわけです。能という京都の物語が多いようなイメージがありますが、大阪には京都・奈良よりも前に都があったわけです。仁徳天皇の難波宮がありました。

難波宮の時代からの能というのがたくさんあります。能が大成されて650年ですが、創建1800年の住吉大社はそれより長い歴史があります。住吉大社との関わりのある能が非常にたくさんあるということ、大阪を題材にした能が多いことにこの講座の機会を得て改めて気づきました。

高砂

高砂という曲は能の中では非常にポピュラーな作品ですし、能を知らない方でも高砂という耳にされたことはあるのではないかと思います。結婚式という高砂とぴんと来る方は多いのではないかと思います。新郎新婦が座る席も高砂の席といいます。結婚式で、「高砂や」という謡を謡います。高砂という結婚式、高砂が能の曲であるということを知っている人も多いのですが、何故結婚式で高砂かを知っている人は意外に少ないです。先ずこのポピュラーな高砂からご説明していきたいと思います。

画面をご覧ください。



どこかでご覧になったことはないでしょうか。最近若い人に言っても判らないのですが、結納の品

の一つで木彫りの人形がありますよねとか、結婚式やお正月の掛け軸で床の間に掛けてありますよね、と言うと判って頂けることが多いです。これは能の前半に出てくるおじいさんとおばあさんの姿で、こちらは、後半に出てくる神様の姿です。どういう物語かという九州の阿蘇宮の神官が、兵庫県の高砂市の高砂神社にやってきました。おじいさんとおばあさんが出てきて松の葉を箒で掃除していて、自分達は松の木の精であって、おばあさんの方が高砂神社に生えている松の木の精で、おじいさんの方は住吉大社に生えている松の木の精であり二人、二本は夫婦なのだと言います。遠いのですが、二本は根が繋がっているというお話です。二本の松は夫婦であって、当時は結婚の形態は通い婚ですから男性の方が女性の方へ通い、こんなに共白髪になるまで仲良く通い続けて、このように年老いたのだよと述べる、ということで非常におめでたいので結婚式の時に高砂という曲を謡うということになっています。

また能楽堂の後ろには必ず老松の絵が描かれています。何故かという、昔の人は松の木は常に緑で枯れないと思っていました。実は葉っぱが散ってまた生えてきて、全部の葉が散る前に次の葉っぱが生えてくると言うことなのですが。そして松の木は非常に寿命が長いです。今は平均寿命が80を越えるというような時代になり、ただ生き延びることが大変という時代のことは忘れられています。昔は生まれて、元気で健康で、しかも笑いながら仲良く生きていくということが非常に大変で、そんな時代が、ついこの間まであったと思います。私は広島出身ですので原爆・戦争のこととか、人類が平和で仲良く生きていくということが大変だった時代というのを何となく身にしみて感じて育ったものですから、お能にも感銘を受けることが多いです。命というものは大事なものです。命を与えてくれる生命・宇宙のパワーにみんなで感謝して、また明日希望を持って、みんなで助け合って生きていこうという力を与えてくれるも

のが能の祝言性だと私は考えています。その最たるものが高砂というような祝言の曲です。まさに能楽堂の後ろに象徴として描かれている老松は、宇宙の生命のパワーの象徴として描かれていて、そのためこの空間に神やあの世の亡霊が降りてくることのできるわけです。

他にこのような説があります。何故松か。横に竹が描かれていることが多いです。松・竹とくれば梅ですが、舞台に梅はなく、梅はどこだということになります。花は舞台に役者が作り出すものであるという考え方です。世阿弥が、能というものは人の心から心へ伝える花であると言いました。役者とそれをみる観客との間に生まれる感動が花であるということです。ですから能は観客を楽しませる大衆娯楽ではなく、この世の幸せをともに祈って、未来への希望を共有する空間であると言えます。能というものが敷居が高く堅苦しい感じがして、大衆娯楽として受け入れにくいのもこのような背景があります。

このおじいさん、住吉の松は住吉明神でして、阿蘇宮神主に「私はこれから住吉に帰るので、あなたはここから船出して住吉にいらっしゃい。住吉明神の姿を現してこの世を祝福する舞を舞いましょう。」と言って消え去り、神主はその言葉に従って船出ていきます。それが有名な「高砂や この浦舟に 帆を上げて」の待謡（後ジテ：住吉明神の登場を待つ間にワキ：神官の謡う謡）です。今日最後にこの部分の仕舞を舞わせて頂きますが、「夜満潮になるとともに船を出すと船が速く走るの、その時に高砂を船出して航行していくと淡路の島影が遠くなって行って、鳴尾の沖も過ぎて、早くも住之江に着いた。」というめでたい曲ですので謡わせて頂きたいと思えます。

(待謡のご披露「高砂や この浦舟に 帆を上げて この浦舟に帆を上げて 月もろともに 出汐の 波の淡路の島影や 遠く鳴尾の沖過ぎて はやすみのえに着きにけり はやすみのえに 着きにけり」—拍手)

このようにこれはワキの謡で、阿蘇宮からやってきた神官が住吉明神を待っています。そこに住吉明神が現れます。後の「白楽天」ではおじいさんの姿で神様が現れますが、神様は信仰する人々が期待している姿で現れますので、この場合は颯爽とした姿で現れます。住吉明神がどういう風に信仰されているかということ、先ず航海の神様です。航海の安全を守ってくれる神様です。今では新幹線とか飛行機とかが輸送手段として発達していますので、忘れ去られがちですが、交易や人の流通の仲立ちをする船が一番の交通手段だった時に、海の神様である住吉明神は非常に大事な神様だったということです。住吉明神は住吉三神みほしらと言って三柱の神様です。住吉大社に行きますとこの三神と神功皇后が祀られていて、社殿が四つあります。底筒男命そこつつののおのみこと・中筒男命なかつののおのみこと・表筒男命うわつのおのみこと・神功皇后です。神功皇后は紀元200年ぐらいの方で、仲哀天皇の奥さんで、応神天皇のお母さんです。新羅に出兵して凱旋された時に、もともと九州の神様であった住吉明神を、力を借りて勝つことができたとして、大阪の住吉にお祀りしようということになりました。

住吉三神というのが何時誰から生まれたのかを知っている人も少ないのですが、伊弉諾尊いざなぎのみことから生まれています。伊弉冉尊いざなみのみことが死んでしまい、仲のよかった伊弉諾尊は悲しんで黄泉の国まで追って行くのですが、妻はもう死体になって体は朽ち果てて、蛆虫がわいているような状態で、伊弉諾尊は驚いて逃げ帰ってきます。逃げおおせたのですが、この世に帰って来たときに、黄泉の国の穢れが体に着いていたのを海で禊ぎをして穢れを落とします。その時に沢山の神様が生まれていて、その中の3人が住吉三神です。伊弉諾尊から生まれたということになります。

高砂神社に行きますと相生の松というのがあります。能の高砂では住吉大社と高砂神社の松が繋がっていたとっていますが、他の説として相生の松は伊弉諾尊と伊弉冉尊の化身であるという伝

説もあります。松の木の精が夫婦の象徴であるというのは松の葉というのは必ず二つ繋がっているの仲のよい夫婦の象徴ということです。

手元にある資料をご覧ください。能の高砂の原文のコピーです。ご紹介したいところだけを抜き出しています。(資料の引用部分を行書体で示す。以下同様)

「松も年ふりて 老の波も寄り来るや 木の下蔭の落ち葉かくなるまで 命ながらへて

なほ何時までか生の松 それも久しき名所かな それも久しき名所かな」

前半のおじいさんとおばあさんが現れて謡っているところです。松のことだけでなく自分達のことをいっています。だんだん私達も年を取ってきた。松も落ち葉が落ちるほど年老いてきて、それをかく(このように)年をとった私達が掻く(掻き寄せる)ほどになった。これからどれだけ長く私達は生きていくのだろうか。という感じでは。

よくお能には散った花びらや神木の落葉を掃除する宮人・宮司がでてきます。これはただの掃除ではありません。神木の葉というのは霊気・パワーが宿っているものですからそれを掃除する箒自体が神具であるということで、正倉院などにも神具である箒、玉箒が伝わっています。葉っぱを集めて適当にどこかに捨てるということはず、大事に、大事に廃棄するということです。松が散り積もるといことは自分達の人生・年月・大事な経験も散り積もったものだからこのように大事にかき集めるわけです。そして、阿蘇宮の神官が、やってきた老人夫婦に高砂の松はどの木かと尋ねると、私達が掃除していた木です、と答えます。相生の松についての遣り取りの後、「不思議や見れば老人の夫婦一所にありながら 遠き住吉高砂の浦山国をへだてて住むというは如何なることやらん」と尋ねます。これに対して、姥(妻)は「うたての(情けない)仰せ候や 山川万里を隔つれども 互に通う心遣いの 妹背(夫婦)の道は遠からず」と応じます。というようにとても仲のよい夫

婦の物語ですので、高砂という曲は結婚式に使われるということです。

こちらは住吉大社の入り口です。有名な住吉鳥居の特徴は柱が四角いことです。普通鳥居の柱は丸いのですが、住吉の柱は四角です。丸太を四角に加工する技術を持った渡来人の手によるものであろうと言え、渡来系の技術がここに非常に早く入っていたのではないかと推測させる非常に貴重なものです。

こちら住吉公園です。住吉大社のシンボルマークでもある灯籠がずっと立っています。本来はここを抜けるともう海でした。昔は海だったのですが、干拓や新田開発、今は住宅のための埋立によってどんどん海が遠くの方になってしまいました。

灯籠というのは船が帰って来るための大事な目印でした。住吉公園を抜けますと道路を隔ててこちら側に高灯籠というものがあります。鎌倉時代末期に作られたのではないかとされていますが、定かではありません。ジェーン台風で倒壊して、これは再建されたものです。本来は高さ16mあるのですが、この向こうがすぐに海になっていて、船がすぐに着くことができました。今は海はここからさらに7km向こうになっています。

住吉明神に対する信仰が平安・鎌倉を通して非常に流行しました。何故かという。住吉明神は伊弉諾尊の禊ぎによって生まれたということで、天皇の即位の儀礼の時に天皇が天のパワーを受けるために、住之江で伊弉諾尊に倣って穢れを落とすために禊ぎをするという行事がありました。平安・鎌倉という関西に都があったときには、九州まで行って禊ぎができません。本来、伊弉諾尊が禊ぎしたのは宮崎でした。奈良・京都から見て、海というのは、この大阪の海で、天皇が即位した時に禊ぎをしたのがこの住吉の海でした。「すみのえ」は澄み切った「澄江」ともいわれています。

昔は大阪は島だらけでした。中之島とか堂島といいますが、心齋橋・淀屋橋も実際の橋のことで、

川の中に島が浮かんでいるような状態でした。それを伊弉諾尊と伊弉冉尊が作った日本の8つの島、^{おおやしま}大八洲に見立てて、天皇であるからには島々の霊を招き寄せて、八つの島を治めなければいけないのですが、その治める力を手にした天皇の天皇としての資格を祝福するという儀式が行われました。八十島祭です。後鳥羽院の八十島祭に從った津守経国の和歌です。

「天の下のどけかるべし 難波潟 ^{たみの}田蓑の島に ^{みそぎ}御祓しつれば」

八十島は、田蓑島のほかに中之島、福島、曾根洲、^{くじしま}柴島などの地名に残っています。

住吉詣

次に「住吉詣」というお能について説明します。住吉詣というのは『源氏物語』の^{ももつぐい}漣標の巻を題材に取っています。漣標というと明石の上と光源氏のお話になります。『源氏物語』の漣標の巻を読んだことがあるという方はいらっしゃいますか。それはかなりの文学通です。明石の上は『源氏物語』の中でも人気キャラクターですのでご存じの方は多いと思います。『源氏物語』の中の話しを先に説明します。光源氏が本来手を出してはいけない女性、^{おつき}朧月夜の君に手を出してしまったということです。光源氏は天皇の息子でもあるのですが、頭もよくて、政治的にも優れた人で人望もあり、政治的抗争に巻き込まれています。左大臣方と右大臣方があって、光源氏のバックアップをしていたのは左大臣方でした。右大臣方の美しい娘、朧月夜を天皇の皇后にしようとしていたのに、光源氏が出手を出してしまい、非常に拙い立場になってしまいます。丁度その時、光源氏のバックアップをしてくれていた人が亡くなっていたりして、都に居づらくなって政治的に失脚しかかった状態で須磨に逃れます。その時に、血筋も正しい美しい姫君、明石の上と出会い恋仲になりますが、光源氏は政治的に立場がよくなって都に戻っていきます。その時明石の上はお腹に子どもがいて、光源

氏は必ずきつとあなたを都に呼び寄せますからと約束して帰って行きます。都に帰っていった光源氏は都ではまたたくさん美しい女性もいますし、色々な忙しいことや華やかなことがあって、いつの間にか明石の上のことを忘れて忙しくしていました。そんな中で、非常に大切だった行事が住吉大社へのお礼参りです。須磨に逃れていた間に、どうかまた都に戻して下さいと、住吉明神に常に拝んでいましたので、それがかなったものですから住吉詣にやってきます。というほど住吉明神は信仰されていたのです。紫式部の時代にも信仰されていたのです。



この絵の中心は住吉詣をしに来ている光源氏の華やかな一行です。住吉の鳥居が見えていて、住吉大社のシンボルである太鼓橋がみえています。これは江戸時代の絵ですので、淀殿が豊臣秀吉に命じられて住吉大社に寄進したといわれている太鼓橋が描かれています。一方明石の上は姫君を無事出産しましたが、光源氏からのお呼びは未だありません。画面の舟は明石の上の舟です。明石の上もお父さんの命令で、光源氏に出会う前に毎年住吉詣に来ていました。住吉明神は夫婦和合の神様ですので、すばらしい姫君がすばらしい男性と出会って一緒になれるようにということをお父さんが祈願していたので、お父さんの命令で、来ていたのです。お姫様、光源氏の娘の出産で1年お休みしていましたが、無事生まれたので、また住吉詣にやってきました。遠くから小さな船でやってきました。するとここからでも華やかな行列が見えるので、「あれは何かしら」というと「ご存じなかったですか、あれは光源氏様の住吉詣です。」といわ

れて明石の上は情けない思いをします。あれほど愛を交わし合い、きっと呼び寄せると約束までしたのに、あの方の華やかな住吉詣が今日あると知らずにここに来てしまったこの私の悲しさよ、ということです。光源氏の忠臣の^{これみつ}惟光が間をとりもって、和歌を交わし合います。結局ここでは2人は和歌を交わし合うだけで別れますが、やがて光源氏は明石の上を呼び寄せます。これを題材にしたお能があります。

画面は、住吉詣というお能です。こちら側に光源氏の華やかな行列で、こちらは、こんなに華やかではないと思いますが、沖の方からやってくる明石の上です。そして2人が一緒に舞を舞うところ。お能では2人は出会って盃を^{たびかさ}度重ねて交わしあって、約束を確かめ合って酒宴の席で舞を舞うという演出になっています。『源氏物語』の中ではこういうことは起こっていません。

資料の原文を見て下さい。住吉詣というお能の最後の方です。

「不思議やな ありし明石の浦波の立ちも帰らぬ面影の

それかあらぬか舟影の^{しのぶもじざり}忍振摺誰やらん」

「懐かしい明石の浦の、そこへ私は立ち戻りもしなかったけれど、あなたの面影が今日の前に見えている、だけれども海の向こうにほのかに見える舟影のようにほのかなあなたの姿であって、あなたはそのように自分の姿を忍んでいらっしやるので、あなたかどうかさだかに判らないのだけれど、本当に明石の上、あなたなのかい。」とっているのです。そうしましたら、明石の上は

「誰ぞとは 外に調めの中の緒の その音がわすれ逢いみんの 頼めを早く住吉の 岸に生うちょう草ならん」

「いま華やかな行列をされているあなたを取り巻く周りの人達に、私が誰であるかとかあなたとの関係がどうであったかとか知られてしまったら、あなたに迷惑がかかりますでしょう。」と言っているのです。こういう女性だから後に光源氏は明石の上を忘れられずに呼び寄せたのではないかと思います。「調め」は知られてしまうのは拙いでしょう

という「知ら」と琴・琵琶、弦楽器の「調べ」と掛詞になっていて、「その真ん中の大事な弦であなたと私の魂が繋がっている。」ということになっていくのです。「あの時、必ず私ともう一度会って下さるとあなたが仰った言葉を、きっとあなたは違えることはない頼みを掛けて待っていたのです。その頼みを早くかなえて欲しいと思って、住吉の岸にただ一人生えている草のように待ち続けているのですから。」と言います。これに対して、光源氏はちょっと憎らしいのですが、

「忘れ草 生うとだに聞くものならば その約言もあらじかし」

「住吉の岸にはわすれな草が生えるんだよなあ。ちょっと忘れてたよ。」と答えます。それに対して明石の上は

「げになおざりに頼め置く その一言も今ははや ありし契りの縁しあらば 懸ての逢瀬も程あらじの 心は互いに変わらぬ影も盃の度重なれば惟光も 傳御酌をとりどりの 酔いに引かるる戯れの舞 面はゆながらも移り舞」

「あなたとしてはそんなに真剣に私と約束をされたつもりではなかったのかもしれませんが、今となってはこうして再会することが出来たのですから私は幸せです。今は対面して会うことはできませんが、ちゃんと直接に会えるのももうすぐ間近なことだと信じています。」と応えます。惟光が間に立って取り持っています。二人の^{あいま}相舞も心が沿っているがため、実際に相舞をしているというより、心の中で愛の舞をかわしていると解釈すると美しいのではないかと思います。この後に『源氏物語』に実際に出てくる和歌が読み込まれています。

『源氏物語』の中で光源氏が詠んだ和歌を能の中では明石の上が謡っています。「身をつくし 恋うる駿に 此処までも 廻り逢いける 縁は深しな」「私の身を心をこのように尽くし、全てをあなたに捧げてあなたを恋慕ったその結果として、此処にやってきて、あなたと巡り会えた、その縁はとても深いものですよね。」この歌で「身をつくし」は「濡標」と掛けられています。『源氏物語』のこの場面の巻の名前になっていますが、画面のこの写真が濡標で

す。大阪市の市章になっています。湊標というのは船が航海する時にこの印を頼りにこの間を通って行けば大丈夫だよという印です。場所によっては、海の底が浅いと船底が削れてしまうので、船の航海に危ないところには、十分に深いところ、航海できるところを知らせる印を立てていました。これがないと船は座礁したり、倒壊してしまったりします。これは明石の上の身の上を表現しているのでしょうか。何をしるべにこの愛の行く先を決めればいいのか、彼女にとっての湊標は光源氏を信じることであったと思います。それに対して、『源氏物語』の中で明石の上が返した和歌が次に出てきます。

「数ならで 難波の事も かいなきに なに身をつくし
思い初めけん」

「私なぞあなたの相手として、ものの数にも入らない程の小さな存在です。ここ難波は、難波の江で別れた夫婦が出会ったという昔話にあるように、男女が再び出会うことができるというジンクスがあるところですが、そのジンクスも甲斐の無い程に取るに足りない身の上ですのに、身を尽くしてあなた様を恋慕って来たのでしょうかねえ。でもこの心が捨てることができなくて。」といった甲斐甲斐しい女性なのです。最終的には光源氏は明石の上を呼び寄せるといふ事になるのですが、お能ではここで相舞を舞って別れていくこととなります。幽霊などがでてくるのではなく、現実に生きている人間が現在の事件を演じている現在能です。

これは南海電車住吉大社駅の前にこのモニュメントが建っています。住吉詣のレリーフです。御所車・光源氏の行列・明石の上の船が描かれています。ご近所ですので通りすぎりに見て頂きたいと思います。

富士太鼓

次に「富士太鼓」について解説していきたいと思
います。萩原院（花園天皇：在位1308～18）の頃
に富士という芸名の雅楽の太鼓の奏者であり舞人
が居ました。この写真は楽人の妻です。夫の敵を
討つ為に夫の形見の衣装を着て「にくい太鼓め」と
夫の敵の太鼓を打っています。何故敵を討つ羽目
になるかという、実は富士は住吉大社に仕える
太鼓の楽人でした。雅楽・舞楽というのは宮廷の式
楽、つまり天皇家の式楽です。それに対して能は
武家の式楽です。式楽というのは儀式的折に正式
に演奏される音楽であったり、舞であったりです
ので、宗教的背景があるのですが、神様と心を繋



げるために演奏するということだと思
います。住吉大社でもこの写真のようにお祭の時に舞楽・雅楽
が行われます。住吉大社の「卯之葉神事」（住吉大
社の御鎮座記念の祝祭の神事）です。住吉大社の
創建されたのが卯年卯の月卯の日であったので、
当時は太陰暦で今は太陽暦でずれていますし、卯
の日は毎年変わりますが、毎年五月最初の卯の
日に行われます。卯といえば兎です。神社の手を
洗うところはだいたい龍とかいますが、住吉大社
では兎さんの口から出ています。兎さんの形のお
みくじがあったりします。石舞台が住吉大社の中
にあります。重要文化財ですので、摩耗しますから、
余り上がってはいけないのですが、卯之葉神

事の時だけには敷物を敷いて舞楽を催すことにな
っています。

これは四天王寺の精霊会です。精霊会というの
は聖徳太子の命日のお祭です。四天王寺の中にあ
る石舞台で演じられています。日本の三大舞台の
二つが大阪にあります。（もう一つは広島県廿日
市市の厳島神社）

あるとき天皇が宮中で舞楽の祭を催すと仰り、
太鼓の楽人が雇われました。富士は自分こそは日
本一の太鼓の楽人なので、召されるべきだと思っ
たのですが、召されたのは四天王寺の楽人の浅間
でした。富士は自分こそその役にふさわしい、私
を雇ってくれと名乗りでます。都にのぼっていき
ます。それに対して天皇は、「信濃なる浅間の嶽も
燃ゆるといえは 富士の煙のかいやなからん」とい
う和歌を引き合いに出して、山として高いのは富
士ですが、「噴火して煙が立ち上ったら浅間の煙は
どこから見ても見える。富士の煙の負けるよな
あ。」ということで、最初の宣言通り浅間を雇い
ますから、あなたは帰りなさいと英断を下しまし
た。でも本来は、人を比べる歌ではありません。
信濃へ旅に出る友達にお香に添えて送られた和歌
です。「せめてものお餞別に贈りますが、あちらの
お香の方が香りとしては優れているかもしれませ
んけれども。」という謙虚な和歌です。

それで富士が浅間を憎んで殺したというのなら
分かるのですが、不思議な事に浅間の方が、富士
がとても生意気な行いをしたと憎み、富士の宿に
やってきて殺してしまいます。形見の衣装を宮中
の人が預かって、きっと富士には妻や子どもがい
るであろうから、もし尋ねてきたらこの形見の衣
装を渡してやろう、という風なところから「富士太
鼓」は始まります。殺人事件はお能には出てきませ
ん。妻と子が登場します。いつまで待っても夫が
帰ってこないのが不安に思い都に旅立ち、形見の
衣装を渡されます。そして、これも不思議な事
に、妻が敵は浅間だといって浅間を殺しにいくと
いうのなら分かるのですが、敵は太鼓だと太鼓を

打ちます。敵を討つと太鼓を打つの掛詞で遊ぶという意味もあるのでしょう。よくよく考えれば、そこまで太鼓の役に執着したということ、太鼓が敵という気持ちが分からないでもありません。妻に形見の衣装を身につけさせて、太鼓が敵と思わせて太鼓を打つのを鑑賞する、というところにこの能のおもしろさがあるのですが、この能はさらにおもしろくて、妻が太鼓を打とうと迫っていくところに夫の霊が乗り移ります。下手なおまえなんか打っている場合じゃない、この太鼓はおれが打つのだとこの太鼓を打つのですが、この能を鑑賞している人は、知らなかったら判らないという演出です。能面をかけ直すというようなことありません。

原文を見て頂きたいと思います。

形見の衣装を渡されて「夫が殺されたと言われてもきっと嘘だと思って信じていなかったけれど、目の前に形見の衣装を渡されて信じるしかない。間違いない夫の鳥兜・狩衣を見ると、もう疑うこともできない。あの人が出かける時に『天王寺の楽人は天皇に召されて都にのぼったのです。あなたは天皇の勅証もないというのに、それを押して名乗り出たら、下々の身として天皇を試すというとても僭越な、危険な事です。』といさめました。『その上あなたは住吉大社に雇われて、無事に暮らしている身ではありませんか。これ以上なんの望みがあるのですか。』と私は止めたのに、知らない顔をして出て行ってしまった。何があっても止めておけばよかった。あの太鼓こそ父の敵よ、一緒にあの太鼓を打ちましょう。」と半ば錯乱して太鼓に向かっていくわけです。「見れば見るほど腹が立つ」と妻が太鼓を打つところに、原文に「富士が幽霊来ると見えて よしなの恨みやもどかしと太鼓打ちたるや」とあり、富士が「もう恨みつらみが問題ではない、おまえが太鼓を打っているのはもどかしい、そこをどきなさい。私が打ちます。」と妻に乗り移ります。では夫は何を思って太鼓を打っていたのか。舞楽・雅楽が宗教儀礼であるとい

うことは、この世の平和を祈願して太鼓を打つという志が富士にはあったのではないか、それを日本で一番中心的な、神に近いお祭の場で自分がしたいという芸術家の野望に似たところがあるのかもしれないませんが、そういう望みがあって名乗り出たのではないかと思う訳です。やがて、夫と一体になって太鼓を打つうちに、妻は夫の気持ちを理解して、「恨みは忘れました。もうこの太鼓を恨むのは止めましょう。」と言うのですが、夫への心残りはあって太鼓に心を残して帰って行く事になります。参考までに、同じ題材を扱ったものに「梅が枝」という曲があります。富士の妻の幽霊が後々現れて、夫に対する愛着、仏教で言う煩惱のために悟りに至れず、魂がいつまでもこの世に残り太鼓を打ち続けているというお能です。

玉井

次に「玉井」です。皆さんがよくご存じの昔話のもとになっています。海幸彦と山幸彦の物語です。原文を見て下さい。「天地が創造されて始まってから天の神が七代、地の神が四代現れ、四代目の火々出見尊というのが私である。兄の火蘭降命の釣り針を借りて、」とあります。これは山幸彦・海幸彦の伝説です。弟は何時も山で猟をしていて、兄は海で魚を捕っていました。たまには取り替えてみようかということになり、弓矢と釣り針を取り替えて出かけます。弟が釣り針を魚に取られて無くしてしまいます。兄が「許さない、何が何でもあの大事な釣り針を取り戻してこい。」と言いますので、弟は自分の大事な弓矢の鏃を溶かして釣り針をたくさん作って、兄にあげるのですが、それでも「ゆるさん。おまえに貸したものを取ってこい。」と言いますので、仕方がなく海の底、竜宮に取り返しに行こうという話しになります。昔話では海幸彦・山幸彦ですが、火々出見尊です。地の神様の一代目の天照大神のひ孫になり、お母さんが木花開耶姫で富士山の神様とも言われていますが、この兄弟は火の中でうまれていて「火」という

字が名前に入っています。天神の一代目が
あまのみかぬしのみこと
 天御中主神、宇宙の中心と言うような名前です。
 そして天神の七代目に至って漸く伊弉諾尊と伊弉
 冉尊ということになります。

海の中に入って釣り針を捜してこようというこ
 とで、しおつちのおじ
 塩土男翁というのは 底筒男命・中筒男命・
 表筒男命と同一体と考えられたりもするのです
 が、海の神様と簡単に思って頂けばよいと思いま
 す。その案内で竜宮への道を真っ直ぐに向かっ
 ていき、水もなく真っ新な砂地のわたづみのみこと
 海神の都に着きます。キラキラと瑠璃の瓦で輝
 いている門があり、その門の前に玉の井戸があ
 ります。「玉」というとお能では、宝石で飾ら
 れているということです。この井戸は銀色に輝
 き、ほとりにあづ
 湯津の桂の木がありました。湯津の桂の木とい
 うのは天照大神の弟のつぐよみのみこと
 月読命が、この地に降り立った時に立っていた
 という謂われのある木です。湯津と書かれてい
 ますが「いづ 斎く」という音が変化したのではない
 かと言われています。月に桂の花は咲くといわ
 れていますが、『古事記』の中では、この桂の
 木に火々出見尊が登って様子を見ています。す
 ると2人の美しい女性がこの井戸の水を汲みに
 やってきます。人間の命にとって一番大切な水
 を汲むということは深遠な意味があるのですが、
 ここに海神の2人の娘、とよたまひめのみこと
たまよりひめのみこと
 豊玉姫命・玉依姫命がやってきて水を汲みま
 す。井戸の水を汲もうとしてそこに非常に美
 しい男性の顔が映っているものですから、お姫
 様は一目惚れするのです。それが木に登って
 いた火々出見尊です。その火々出見尊をお父
 さんのところへ連れて帰って、事の由を説明
 しましたら、非常に血筋も正しいすばらしい
 男性であったので、それでは早速、海のもの
 達、手下達に釣り針を捜さしましょう。それ
 をお返しして、ついでにうちの娘二人をあ
 なたの妻にして下さい。ということで一緒に
 地上に帰すという話になります。ですけれど
 も、うちの兄はとても難しい人なのでそれ
 でも許してくれないかもしれません。と火々
 出見尊がいきましたら、じゃあ万一そのよう
 なことになった

時のために、大事な珠を二つあなたに差し
 上げましょう。つまり娘二人に珠を一つづつ
 持たせて火々出見尊と地上に帰すのですが、
 その玉というのがしほなつたま
しほひるたま
 潮満珠と潮干珠といいます。潮満珠は海を
 満潮にさせる魔法の珠で、潮干珠は干潮に
 させる魔法の珠です。それを以て、釣りを
 して生計を立てる神様であるお兄さんを
 支配できるであろうということです。潮満
 珠と潮干珠を手に入れた火々出見尊は、
 海神に守られて帰って行きます。

画面のここに二人いるのが豊玉姫命・玉
 依姫命です。子どもがする時にはこのよ
 うに能面を付けませんが、大人がする時
 には美しいこおもて
 小面をつけます。こちらは桂の木、能の
 作り物です。こちらが玉井を表していま
 す。

これが住吉大社の北側にある大海神社
 で、住吉大社が鎮座する前からここに
 あったといわれています。海を守る氏
 神様で、津守氏の氏神様といわれて
 います。その横に玉井があり、この中
 に潮満珠が沈められているといわれ
 ています。本当かどうか判りませ
 ん。



潮干珠はどこにあるかといえば、堺に元住吉とい
 われるしゆくいんとんぐう
 宿院頓宮がありまして、そののしゃもじの
 形に似ているといわれるいらいぼり
 飯匙堀の中に埋められているといわれ
 ています。

白楽天

次は「白楽天」です。白楽天というお能をご覧になった事がある方いらっしゃいますか。これも余り出ないお能です。題名が白楽天で、面が白いしこの人が白楽天かと思いきや、これは住吉明神です。お能ではよくあるパターンですが題名になっているのが主役ではない、ということがよくあります。「葵の上」などもそうです。主役は六条御息所ですが能の題名は「葵の上」である、といったことが時々あります。白楽天は中国の有名な詩人で白居易とも言います。有名な作品は「琵琶行」「長恨歌」です。「長恨歌」を下敷きにした能が「楊貴妃」で、楊貴妃・玄宗皇帝と同じ時代に生きた人です。自分は中国で詩を作ることについては極めたので、日本の文学的素養を窺ってやろう、あわよくば支配してやろうみたいなことだと思うのですが、海を渡ってきます。海の途中で釣りをしている老人が釣り船に乗ってやってきます。そして白楽天と日本の文学的状況について問答して、日本がこんなに優れているということを言い示して、白楽天は脱帽して帰って行く、住吉明神が白楽天を海風を立てて追い返してしまうという非常にナショナリズム溢れる曲です。

これが後半でおじいさんの姿で現れる住吉明神です。こちらが釣り人として海の上に現れるおじいさんです。ここで「白楽天」の原文をご覧下さい。白楽天と住吉明神がどのような問答を交わしているかという箇所です。

白楽天が得意になって自分の詩の能力をおじいさんに示そうとする所です。海の方こうに山々が見えていると思うのですが、「その景色を詩に作って聞かせましょう。」と白楽天が作った詩です。「青苔衣をおびて巖の肩に懸り 白雲帯に似て 山の腰を圍る」と中国の漢字ばかりの詩を読み下し文にしています。「山か海の岸壁の巖に青い苔がまるで衣のように懸かっていて、白い雲が廻っているのがまるで帯のようである。」という非常に風情のある

詩をつくり、「どんなもんだい。」という感じですか。おじいさんは、なかなかおもしろいと感じて見せます。そして日本においても歌を作る時はこんな感じですか。「苔衣著(着)たる巖はさもなくて 衣著ぬ山の帯をするかな」と詠んで見せました。漢詩も和歌もどちらも素晴らしいと思うのですが、漢詩は厳しく確固たる美意識を以て美しさをただ表現していると思います。それに対して、日本の和歌というのはエスプリが効いていると思います。「巖が苔の衣を着ることはないのだけれども、山が衣を着るといってもないのだけれども、見るからにそういう風に見えるなあ。」と「キヌキヌ」と韻を踏んだ音の遊びも入ったほのぼのとした感じの和歌を詠んだわけですか。これに対して白楽天は、「素晴らしい和歌なんか詠むように見えない、ただの貧しい釣り人に見えるのにあなたは何者ですか。」と聞きますが、老人は名乗りません。「日本においては和歌を詠むのは人間だけじゃないのですよ。中国ではどうかしませんが、花に鳴く鶯、水に棲む蛙も歌を詠みます。ですから、こんな貧しい老人でも和歌を詠むのはたいして難しいことではありません。」と言い、鶯が歌を詠んだと言う昔話を始めます。孝謙天皇(在位749~758)の時代、大和国、奈良県御所市にある高天寺の住職が、ある春に梅にやってきた鶯の声を聞いたら「しよようまいちょうらいふそうげんぼんせい」と聞こえた、と言うのです。それを住職が漢字に直したら「初陽毎朝来不遭還本栖」となり、これはそのまま和歌で、和歌になおすと「初春の朝毎には来れども 遭わでぞ還る 本の栖に」となり、鶯がそんな風に鳴き、これが鶯が和歌を詠んだ謂われの初めであると言うのです。これは、「鶯というのは毎年春になると梅に必ず還ってくるのだけれども、あの人は帰ってこないのだよな。」という和歌です。高天寺の住職が非常に可愛がっていた弟子が亡くなり、悲しんでいたところに鶯がやってきて、この様に鳴いて去っていったのを聞いて、また弟子のことが懐かしく悲しく思い出され

た、という逸話です。「日本には、鶯を初め鳥類畜類が人に類えて歌を詠むという例が海岸の砂の数ほども多くある。」と老人はいいます。和歌というのは紀貫之が『古今集』の「仮名序」の中で述べているように、代々言い伝えられて、人の心を和ませて、人の心を繋ぐものである、ということで、神様が和歌を詠む、それがご神託なのです。神様のご神託は和歌によってもたらされるということで、和歌は非常に大切なものであるということをして住吉明神が現れて述べるというのが白楽天という曲です。

高砂という曲の中に「我見ても久しくなりぬ 住吉の岸の姫松 幾代経ぬらん」「睦ましと君は知らずや瑞垣の 久しき代々の神神楽」と出てきますが、能は勝手に元もとの和歌や原文を変えて能を作っていきますので、元もとの和歌はこれです。「睦ましと 君は白波瑞垣の 久しき世より 祝いそめてき」住吉明神が詠んだ和歌として『伊勢物語』の中にでています。住吉明神は和歌三神の一人と言われています。あとの二人は衣通姫・柿本人麻呂です。ある天皇が住吉詣にやってきた時、在原業平が付き添ってきました。これは『伊勢物語』に書かれています。住吉の松を見て、「我見ても久しくなりぬ 住吉の岸の姫松 幾代経ぬらん」と詠みました。海辺の松の景観が素晴らしかったのだと思いますが、素晴らしい松だなあ、私がふと眺めても随分昔から立っている様に見える、一体どれだけの世を経てここに立っているのであろうかなあ。と詠みました。それに対して住吉明神が現れて、「睦ましと 君は白波瑞垣の 久しき世より 祝いそめてき」と返してくれました。何時も何時も私はあなた（日本を守り治める象徴としての天皇）と一緒に居るということをおあなたは気づかなかったでしょう、神と人を隔てる尊い垣根（瑞垣）が生じた昔々から私（住吉明神）があなたのそばに居て幸多かれと守ってきたんですよ。という和歌です。

この写真は謡曲の史跡です。こちらが、鶯が和歌を詠んだ謂われの地、御所の高天寺の鶯宿梅です。ここに謂われが書いてあります。バスも通って居ませんので、凄く行きにくい場所ですが、非常に風情のある田園の真ん中に鶯宿梅が立っています。



こちらは住吉高校のグラウンドの横に岸の五本松というのが立っていますが、一本枯れて、今は

四本しかありません。昔はこの辺りが岸边だったので岸の五本松です。昔の図絵を彫った銅板のレリーフがあります。阿倍野神社に向かう道ですのでよろしかったら是非行ってみてください。

画面は、最初に謡わせて頂きました「高砂や」の一節です。「月もろともに出で潮の」とあるので入ってきたお嫁さんが、また出て行くというのは縁起がよくないので、結婚式で謡うときには「入潮の」と謡いなさいといわれます。最後に「高砂」の最後の部分の仕舞を舞わせて頂きたいと思います。

「げに様々の舞姫の、声も澄むなり住江の、松影も映るなる、青海波とはこれやらん、神と君との道すぐに、都の春に行くべくは、それぞ遠城楽の舞、さて萬歳の、小忌衣、さす腕には、悪魔を払ひ、をさむる手には、寿福を抱き、千秋楽は民を撫で、萬歳楽には命を延ぶ、相生の松風颯々の声ぞたのしむ、颯々の声ぞたのしむ、」（大きな拍手）

財団法人住吉隣保館の動き

2012年新春のご挨拶



皆様におかれましては、良き新春をお迎えになったことと存じます。昨年は、色々な意味で、大きな出来事が続いた年でしたが、3月11日の東日本大震災、大津波、福島第1原発の事故が最大の出来事であったと思います。あらためて、日本は、「地震大国」であること、地震や津波そのものは避けられないが、備えをしておれば被害は最小限に食い止めることができるということを教えてくれたと思います。

また、原発が持っている恐ろしさ、原発は決して「安全で、安価なエネルギー源」ではないことを教えてくれたと思います。

今後、復旧・復興の支援を継続するとともに、来るべき東海、東南海地震(30年以内・70パーセントの確率)に備え、対策を講じておくこと、人と人とのつながりを密にしておくこと、安全・安心なエネルギー源への転換を図ることが重要だと考えています。

もう一つの大きな出来事は、11月27日のダブル選挙で、松井知事、橋下市長が誕生したことです。

私自身や部落解放同盟大阪府連住吉支部などは、本当に困っている人の人権を原点に物事を考えるという視点、多様な意見がある中で時間を掛けて物事を決めていくという民主主義の視点から、両候補については批判的な立場を取ってきました。

当選以降、次々と打ち出されている政策(例えば、「教育基本条例」や「学校選択制」の導入など)は、その心配を裏付けていますが、①区役所の役割を重視するとする視点、②子どもや若者、雇用を重視していく視点、③安全・安心の観点から原発を廃止するとの視点は、支持できることではないかと考えています。

このような中で、本年は、地域住民、とりわけ困っている人びと、センターの利用者の立場に立って、財団なり市民交流センター等の仕事をしっかり果たしていく必要があると思っています。また、住吉地区や住吉小学校区を対象とした「人権尊重の新たなまちづくり」に参画していきたいと考えています。

幸い、皆様のご支援のおかげで、昨年10月29日の「財団法人住吉隣保館設立50年、故住田利雄さん生誕100年」の記念集会には、420名を超す参加者があり、大ホールが一杯になりました。また、地元の歴史や初代理事長、館長でもあった故住田利雄さんの思いを1冊にまとめた『忘れてはならない自主解放』も発刊できました。(残部がまだ少しありますので、是非この本を一人でも多くの方にお読み頂きたいと願っています。)これらの成果を、これからの取り組みに役立てていきたいと思っています。

また、国の公益法人制度改革に伴う、公益財団申請も大阪府の事務当局レベルでは、ゴーサインを頂くことができ、昨年12月27日に電子申請を行うことができました。この1月20日に審査があり、おそらく認可を頂けるものと思っています。財団は、主として、基金の利子と寄付金、賛助会員の会費によって独自事業を実施していきますが、皆様のご支援を御願い致します。

本年は、全国水平社90周年という記念すべき年にあたります。「人間は尊敬すべきものだ」との叫びのもとに、一人ひ

とりの人間が光り輝く存在として尊重される社会を作るのだという目標を掲げ水平社が創立されました。それから90年、幾多の困難を乗り越え、この目標を達成するために様々な運動が続けられてきています。財団法人や市民交流センターすみよし北の仕事も、この水平社宣言と90年の運動からも学んでいく必要があると思っています。このための取り組みの一環と致しまして、本年の4月22日(日)午後1時半から市民交流センターすみよし北におきまして作家・高山文彦様による「全国水平社90周年と松本治一郎」(仮題)と題した講演会を開催したいと考えています。皆様にも是非ともご参加頂きますよう御願い申し上げます。

内外情勢を見ますと、新しく迎えた2012年は、昨年以上に政治や経済の面での激動が予想されますが、財団なり市民交流センターすみよし北を支えて頂いております皆様方との「絆」をしっかり和固めて、乗り越えていきたいと思っています。

昨年一年間、皆様方から頂きました財団と市民交流センターすみよし北に対するご支援に感謝申し上げますとともに、旧年に倍するご支援を御願いし、年頭に当たってのごあいさつと致します。

2012年1月10日
財団法人住吉隣保館
理事長 友永健三

故住田利雄さんの遺品目録を作成して(後編)

先月号に続いて、住田利雄さんが亡くなる寸前まで記録し続けた遺産の一部について報告します。先月号では、日記、書、絵画を中心に報告しましたが、今回は、財団法人が所蔵する住田利雄さんが記録した写真コレクションに注目します。この他にも住田利雄さんが残した著作が多数あります。それらは財団法人住吉隣保館設立50年、故住田利雄さん生誕100年記念事業実行委員会が編集した『忘れてはならない自主解放』の「住田利雄さん著作一覧」に収められていますので、そちらを参照してください。

現在、財団法人住吉隣保館が所蔵する住田利雄さんの写真コレクションは大きく分けて①家族に関する写真、②住吉地区における人権の町づくりに関する写真、③部落解放や地区改善のための運動に関する写真に大別できます。それらは1952年10月19日から1973年5月28日までのネガを台紙に張りつけた631枚の台紙ネガと、1973年5月19日から1985年1月7日まで現像された写真を収める50冊のアルバムに収められています。

台紙ネガは、財団法人住吉隣保館の前職員であった川口隆男さんにより整理されたもので、1枚の台紙に平均44コマのネガが4列貼りつけられており、約27,700枚の写真が631枚の台紙ネガに収められています。その内容はおもに住田利雄さんの家族写真と住吉地区での住田さんの取り組みに関する写真です。

50冊のアルバムには、1ページに平均6枚の写真が貼りつけられ、そこには約14,400枚の写真が収められていま

す。内容はおもに部落解放や地区改善を求める運動関連の
写真です。そこには住吉隣保館や大阪市立住吉解放会館が
主催した取り組み、支部大会や府連大会、青年集会、女性
(当時は婦人)集会に加え、部落解放を求める全国の研究
集会、狭山闘争などの活動記録があげられます。また、それ
ら大会や集会のあいまを活用した名所めぐり、さらにはアラ
ブ諸国、中国、朝鮮半島、国際連合など、世界各国で人権
問題に取り組む専門家や当事者との国際交流会もふくまれ
ています。

財団法人住吉隣保館は今年、これら台紙ネガとアルバム
に収められている約 42,000 枚の写真を全てスキャナーに取
り込み、デジタル・データとして記録しました。今後はデー
ター・ベースとしてホームページでの公開なども検討してい
ます。また、この報告書で示した住田利雄さんの書、絵画、写
真は A4 判の大きさに印刷しファイリングされていますので、
みなさんも手に持って確認できるようになっています。

今後、住田利雄さんが収集し記録したこれらのデータを整
理し、活用することで、今後の住吉地区の人権の町づくりの
発展に役立てていけるよう、さらなる取り組みを展開してい
く予定です。

2012年1月10日
友永雄吾

財団法人住吉隣保館ホームページアドレス
<http://sumiyoshi.or.jp>